



女川遺跡出土ガラス製品

地域の文化遺産

越知町の西に聳える横倉山の山麓に楠神（くすがみ）という集落がある。蛇行する仁淀川に面し、現在は44の所帯の暮らす小集落であるが、ここは昔から安徳天皇の陵墓にまつわる伝説のある里である。

土地の人々は、陵墓を守り天皇を祭る祭主の家を「しんかん」と呼んで、天皇に扈從して来たと伝えられる人の墓や修験道修行に使われた遺品など、歴史的な遺物を守って来た。

幕末の文書によれば、当時、「しんかん」は山守（やまもり）と呼ばれ、横倉山を訪れる人はそこに立ち寄って、伝えられる遺物の数々を見せてもらったという。山守の呼称は現在では「陵墓守部」となり、宮内庁から正式の辞令が出るようになったが、伝えられてきた遺物のい

堀見 矩 浩

くつかは博物館の展示資料になっている。

一方、横倉山を正面に見ることのできる越知町の東端に女川（おながわ）という集落がある。ここは仁淀川の河岸段丘に位置し、現在は一区と称する242の所帯の暮らす集落であるが、段丘の突端部に縄文時代の遺跡があり、遺構や遺物が出土している。

このように、楠神といい女川といい、時代こそ異なりはするが歴史的遺物のある集落であり、そこから出る遺物は貴重な地域の文化遺産として尊重され、後世に伝えられなければならない。博物館はそのために役立つようにならないといけないと思っている。

（ほりみのりひろ）館長

おながわ 女川遺跡のガラス製品

曾我 貴行

越知町は、高知県の中央部の仁淀川中流域に開けた山間盆地に位置している。

越知町には現在までに32か所の遺跡の存在が確認されている。このうち、縄文時代遺跡が10か所、城郭跡を含む中世の遺跡が25か所となっており、越知町の歴史的背景を語るうえで、この遺跡の分布傾向は看過できない。すなわち、縄文時代遺跡の分布は仁淀川流域における縄文時代遺跡群の分



布の中に捉えることができ、中世遺跡（主に城郭跡）の分布は主に豪族片岡氏関連の拠点・要衝把握のための城郭配置によるものと理解できる。

越知町の縄文時代遺跡を代表するものに女川遺跡がある。女川遺跡は平成7年に越知町で初めての発掘調査が実施されて以来、継起的に第4次調査までがすでにおこなわれている。調査では縄文時代後期前半から近世まで、各時代各種の遺構・遺物が確認されている。中でも女川遺跡を特徴づける遺物の1つが、標題にある弥生時代のガラス製品である。

このガラス製品は、平成7年12月に実施の第1次調査の際に出土した。出土したのは土坑状の遺構からであったが、その後平成9年2～3月に実施の第4次調査によって、ガラス製品が出土したのは竪穴住居跡の中央土坑からであったことが判明している。この竪穴住居跡ならびに土坑の埋没年代は、出土土器により弥生時代前期末ごろと考えら



横倉山を背景とする女川遺跡（手前の円形の土坑状遺構からガラス製品が出土した）

れる。

次に、ガラス製品の特徴についてまとめてみる。ガラス製品は半円筒状の形状で、大きさは全長(たて) 1.4cm、全幅(よこ=径) 1.6cm、重量は25gである。外面側からみた右端部近くには直径約1.5mmの小さな孔が縦方向に貫通している。この孔は上端部側約1/4を残して以下は内側から破損しており、外面側に開口している。上端部は縦軸方向に対して直角の平滑面であるが、対して下端部は縦軸方向に対して斜交する角度をもった滑面をなしている。製品の表面は、孔の破損部を除いていずれも滑面であり、この形状で一定の時間、機能を果たしていたことがわかる。形状に関しては今のところ国内に類例は見い出せない。

製品の器種についてであるが、仮に管玉とみた場合、外径1.6cm、内径0.9cmの原形のものをはほぼ正確に半截した形状と理解できる。長さについては、上記のような上端部と下端部の形状の違いから、1.4cm以上の大きさのものが何らかの理由によって破断し、もしくは截断され、1.4cmという長さに至ったものと理解される。管玉としての特徴を、国内で出土する管玉一般の特徴に照らしてみると、内径がきわめて大きく、また小孔があるという相違点が見い出される。また1.6cmという外径もかなり大型品の部類に入り、全体として異質というに余りあるものである。したがって、これらの諸特徴から「管玉」という用語の範疇に押し込みきれず、「半円筒状のガラス製品」と呼び続けているのが現状である。

ガラス製品の材質に関しては、肥塚隆保氏(奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター遺物処理研究室長)に分析していただき、カリガラスと特定されている。肥塚氏によれば、カリガラスは、修飾酸化物の主成分として K_2O を約 $18 \pm 2.5wt\%$ 含み、形成酸化物としての SiO_2 は $75 \pm 2.5wt\%$ と多く、中間酸化物として Al_2O_3 を約 $3 \pm 0.8wt\%$ 含有することが特徴とされ、また鉛バリウムガラスとならんで紀元前2世紀ごろには日本に伝えられていたとされている。国内最古段階のガラス素材の一つである。カリガラス自身は日本で製造されたとは考えておらず、中国で製造されたものが伝えられたと考えられている。女川遺跡のガラス製

品についても同様で、素材としてのカリガラスは中国産と考えられている。また材質の分析と併せて、小孔の穿孔方法についても肥塚氏に調査していただいた。X線透過撮影による調査によって、小孔は溶融したガラスを鋳型に流し込む時に、金属線などを鋳型に取り付けておいて作られたもので、後から錐などで穿孔されたものではないことが明らかとなっている。

肉眼観察だけでは得られない多くの知見が、肥塚氏によってもたらされた。ガラス製品の異質性はより明瞭となり、資料の重要性はなお高まることとなった。ここで再び器種についてふれるが、ガラス製品を初めて目にされた時から、肥塚氏は一貫してガラス製品を「勾玉」と呼んでいる。なるほど、小孔に糸を通して垂下し、横からみれば、類い稀な厚みをもった勾玉状に見える。しかも、小孔が当初から準備されていたものとなれば、なおさらに「勾玉」の説得力が増してくる。はたして、勾玉として製作されたものかもしれない。ただ、今のところは「半円筒状のガラス製品」としておく。器種としての特定は類例の増加するのを待ちたい。

話を女川に戻そう。弥生時代前期末ころ、ほぼ真西に横倉山を望む越知・女川の地に弥生びとの集落があった。この集落は、何らかの手段によって中国産のガラスによる製品を入手した。そしてそれは間違いなく、集落の誰かの胸元辺りを飾っていた。国内でも稀少なガラス製品を手に入れた背景には、どのような物流が実現していたのか、どのような情報伝達経路が存在していたのか。1点のガラス製品が、従来調査の手の及んでいなかった高知県中西部の交易・流通の水脈を探り当てる発端になるような気がしてならない。

(そが・たかゆき) (財)高知県文化財埋蔵文化財センター

ヨコグラノキの世代交代

安井敏夫

「ヨコグラノキ」は、わが国の植物分類学の祖・牧野富太郎博士が、高知県高岡郡越知町の横倉山で明治17年（1884年）に最初に発見したものを、明治31年（1898年）に命名・発表した、クロウメドキ科の落葉高木植物である。源平の戦いに敗れた安徳天皇を祭神とする横倉宮のすぐ横の石灰岩の岩場に今も現存している。ただ、この親木（タイプ標本）は、今や木材不朽菌のキノコ「サルノコシカケ」が寄生し、おまけにキツツキが開けたと思われる穴も生じ、無抵抗のまま幾多の障害に耐えている。発見されてから一世紀以上の歳月が経っており、もう相当な老木であり、あと何年生きてくれるのか心配である。

幸い、この親木の生えている“馬鹿だめし”と呼ばれる石灰岩の断崖の真下に、幹廻り61センチほどの若木が2、3年前に確認された。さらに、秋になると黄葉し、それから判断してたぶんヨコグラノキと思われる木が横倉山の南斜面の石灰岩地域に点在しており、この地域での絶滅は免れるものと安心している。

ここで、このヨコグラノキに関するおもしろいエピソードを紹介しよう。それは、地元越知町出身の北川徳淳氏が旧制高等小学校の3年（今の中学1年）の初夏に、同じ小学校の教師であり後のヨコグラツクバネの発見者でもある植物研究家の織田千鶴と一緒に横倉山へ植物採集に行った時のことを記した「横倉の木の親木を発見した織田千鶴の憶い出」という回想録である。その中に、次のような一節がある。

「本宮（横倉宮のこと）の裏へ行った時に初めてヨコクラの木を見せてくれた。その木は大人より少し高い位の木であったが「この木は佐川出身の世界に名高い牧野先生のいう、クロウメドキ科の植物だからよくおぼえておけ」と教えて下さった。……それから空池[※]へ高野の万年杉を見に行った。石灰岩が沢山並んでその間に万年杉がかなり生えているのを見せてもらった。……石に腰かけて昼食していると、急に鳩のような鳥がけんかをはじめ、木の葉と赤黄色い実がバラバラと落ちて来た。先生はその葉を見て「之はヨコクラの木だ、ここに親木があるんだな」……「ここに親木があって、この実を鳥が食い、あの崖上（“馬鹿だめし”のこと）で糞をして、あの木が生えたんだな」と云われたので、「先生、ヨコクラの木の親

木がここにあると発表されてはどうですか」と云うと、先生は「牧野先生が発表後

にその木なら此処にもあると全国から沢山報告が来て、安芸郡や宮崎県など方々にあることがわかり、支那にもあって今では余り珍しくなくなってから発表するほどの事もあるまい」と云っておられたので、今でも空池の親木は誰も知らずにいるのではあるまいか。……」

この記事は70余年前の出来事をまとめたもので、発表されたのは昭和50年（1975年）のことである。その当時牧野博士が発見・命名したタイプ標本のヨコグラノキが“大人より少し高い位の小さな木”とあるので、現在のおおよその樹齢が何い知ることができる。すなわち、当時のヨコグラノキの樹齢を十数年と見積もっても、現在あるヨコグラノキのそれはゆうに120年を超していることになる。従って、当時空池にあった“ヨコグラノキの親木”と言われた木が現存すればそれは樹齢150年近くに及ぶと思われるが、残念ながらそのような木は見当たらない。ただ、空池の少し奥まった石灰岩のあまり露出しない所に、幹廻り92センチ程のヨコグラノキがあるが、回想録中の状況と合わないので同一のものとは断定しがたい。空池縁辺の石灰岩地域にもごく希にヨコグラノキがあるが、幹廻りは一段と小さい。恐らく、“ヨコグラノキの親木”と言われたものはすでに枯死し、その子孫が生き残っているものと思われる。

いずれにしろ、何らかの形で代々子孫を絶やさずに種が受け継がれていくことに対して、自然の生命力の強さを感じさせられる。

牧野博士の発見・命名したヨコグラノキの基準木が、これからの風雪に耐え、いつまでも歴史の語り種として人々に語り継がれていくことを願って止まない。

※からいけ：横倉宮の南西にある小規模な石灰岩のドリーネ状地形

（やすい・としお）学芸員



「ヨコグラノキ」の基準木（横倉山）

友の会だより

野鳥観察会

平成11年3月7日(日)、横倉山自然の森博物館友の会「フォレストクラブ」結成後初の行事・観察会「横倉山で自然の声を聞きますか」が行われた。ただし、当日は朝からあいにくの雨模様で、出鼻をくじかれたような格好になってしまったが、博物館のホールにて、野鳥のスライド(友の会会員の黒岩哲夫氏の分も含め)を交えての講演会が行われた。講師は日本野鳥の会高知支部会員の佐藤重穂氏で、17名の参加者を相手に質疑応答も含め午前中の約2時間半にわたり行われた。

スライドは、高知県下で観察される野鳥全般にわたり、その中には横倉山で観察されるものも含まれていた。特に、平成10年秋には、タカ科のサシバの4000羽もの大規模な渡りが観察されたようである。

スライドを通じて、いろんな野鳥の生態や、日ごろ間近で見る機会の少ない野鳥の愛らしい姿も紹介されたが、一方で、年々悪化する厳しい環境条件の下で必死に生きていく野鳥たちの真剣な姿

を観ることができた。

話の中には、「ここ10年ほど、冬に東南アジアから日本にやってくる渡り鳥の数がかなり減ってきており、その原因として東南アジアの森林破壊が進んでいることが考えられる」と言った深刻な問題や、「鳥類では、きれいで目立つ色をしているのはほとんどがオスであるが、目立つ色というのは基本的に外敵に襲われやすく、子育てをするメスの方が地味な色(保護色)をしている方がいい」といった、子孫を残すために都合のいい方向に長い時間をかけて進化してきた、自然界における不思議で合理的な生態をも学ぶことができた。

さらに、高知城のような街中に残されたわずかな森の空間が、意外に野鳥にとって格好のすみかとなっていて、人間の憩いの場としてのみならず、多方面にわたる“緑の空間”の大切さを実感した。

次回は、4月に横倉山でのアケボノツツジ、トサノミツバツツジ(牧野富太郎博士の発見・命名による横倉山タイプ植物)などの植物観察を予定している。

写真集・絵葉書の紹介

○写真集「横倉山の森」(1999年1月3日刊行)

日本でも希な横倉山のアカガシの原生林を写した白黒作品。すべて見開き対称の珍しい写真集で、アート性の強いものになっている。変わった手法により、森に宿る奇妙な動物や精霊に似た姿が浮かび上がってくるように見え、不思議で神秘的な世界を生み出している。

価格：1000円(税込み) 館内及び県内有名書店にて販売



○「絵葉書」(1999年2月18日発売)

博物館の建物の外観や展示コーナー、それに横倉山とその自然を写したもの。建物は世界的な建築家・安藤忠雄氏の設計によるもので、建物と展示物がうまく調和している。

価格：500円(8枚セット・税込み) 館内のみの販売



平成11年度 博物館カレンダー

月	展覧会	その他
4月	4/17 陶芸家・武吉廣和 ガイアピラミッド展(共催)	
5月	5/16 陶芸家・武吉廣和 ガイアピラミッド展(共催)	
6月	6/15 安藤忠雄建築展(共催) 6/15 牧野富太郎と横倉山展	博物館ニュース Vol.2発行
7月	7/15 牧野富太郎と横倉山展	博物館教室①
8月	8/15 安藤忠雄建築展(共催)	博物館教室② 博物館教室③
9月		
10月	10/2~10/17 さだひさおイラスト展(共催) 10/23 シャガール展(共催)	博物館ニュース Vol.3発行
11月	11/14 シャガール展(共催)	
12月		
1月		博物館協議会
2月		
3月		博物館研究報告 (紀要)Vol.1発行

博物館日誌(抄) (93.11~99.4)

〔平成10年〕

- 11月1日(日) 会館一周年記念特別展「化石が語る太古の生き物たち」を開催する(11月29日まで)
- 11月1日(日) 越知町母親クラブによる呈茶サービス
- 11月12日(木) 広島県芸北町との交流で町長・教育長等7名が来館する
- 11月22日(日) 越知町寿太鼓グループによる平家田楽サービスが行われる。
- 12月1日(月) 横倉山の樹木にプレートを付ける。

〔平成11年〕

- 1月3日(日) 年始特別開館日
- 1月3日(日) 写真集『横倉山の森』発売開始
- 1月10日(土) 映像展「化石が語る太古の生き物たち」を開始する(以後の土曜・日曜に)
- 2月10日(木) 第一回横倉山自然の森博物館協議会
- 2月18日(木) 新ポストカード発売開始
- 3月7日(日) フォレストクラブ(友の会)野鳥観察会
- 3月27日(土) 高知新聞「四国散見」で当館が紹介される
- 4月17日(土) 武吉廣和ガイアピラミッド展を開催する(5月16日まで)
- 4月21日(木) 入館者が4万人を突破する

館員はいま

(堀見) オープンして1年半。いよいよ2年目に入る。何事も2年目がむずかしいとか。元気で楽しい博物館をめざして、新しく挑戦したい。

(小田) 横倉山自然の森博物館は、いつも旬です。四季それぞれの展覧会を味わってください。

(安井) 博物館周辺の植栽も大部成長し、建物が自然の中に溶けこんできた。春は山桜・ツツジ、夏は水庭のきらめき、秋は紅葉、冬は冠雪、と。

(片岡) 青空と周辺の緑、そして建物、小鳥のさえずりを聞きながら、みな様をお待ちしております。

(西森) 今よりもっと、心安らく博物館になるようにして、多くの方に自然を感じとってもらいたいと思っています。

高知県越知町立

横倉山
自然の森博物館

〒781-1303 高知県高岡郡越知町越知丙737番地12
TEL0889(26)1060 FAX0889(26)0620

- 開館時間：午前9時より午後5時まで
最終入館は午後4時30分
- 休館日：毎週月曜日(祝日の場合は翌日)
12月29日から翌年の1月3日まで
- 入館料：大人………500円
高校・大学生………400円
小・中学生………200円
(中各20名以上の団体は100円引込)
- 越知への交通

高知———高知自動車道———越知
高知———高知自動車道———越知
松山———高知自動車道———越知

